

# 特集 国立病院総合医学会セッション “若手医師フォーラム”

口演発表「症例報告部門」最優秀賞 × Dr. Ryu Nakarai

## Restless Legs Syndrome Induced by Brexpiprazole: A Case Report

下総精神医療センター 精神科／専攻医 半井 龍 [指導医] 精神科医長 小泉 輝樹



## 精神科から世界初症例を英語で発信 NHOならではの貴重な機会

### ——応募のきっかけ

指導医の小泉先生から「国立病院機構の学会で、英語によるセッションの機会があるよ」と勧めていただいたことが応募のきっかけです。以前から若手医師フォーラムに参加した先生方に「とても良い経験になる」と伺っており、専攻医として英語で発表できる機会は貴重だと感じました。精神科医としての学びを英語でアウトプットすることで、自分自身の成長にもつながると思い、参加を決意しました。

### ——テーマについて

発表テーマは、抗精神病薬による「足のムズムズ感」に関する症例報告です。足のムズムズ感とは、患者さんの主観的

なつらさが強く、ときに自殺企図につながることもある重要な症状です。一方で、アカシジアやむずむず脚症候群(Restless Legs Syndrome)など、似たような症状を示す疾患が複数あり、それぞれで治療方針が異なるため、適切な鑑別が欠かせません。

今回報告したのは、ブレクスピプラゾール誘発性のむずむず脚症候群と考えられる症例で、世界初の報告と考えられる点も、このテーマを選んだ大きな理由です。抗精神病薬だけでなく、胃薬として使われるスルピリドなど、日常的に処方される薬でも同様の副作用が起こりうるため、精神科以外の先生方にも知っていただきたい内容だと思いました。

### ——準備で苦労したこと

「世界初」とうたう以上、本当に類似報告がないかを徹底的に確認する必要がありました。各種データベースや文献を検索し、受容体親和性などの薬理学的な背景も含めて地道に調べていく作業は時間もかかり、もっとも大変だった

部分です。

また、聴衆には精神科以外の先生方やコメディカルの方々もいらっしゃるため、専門用語をどこまで使うか、どこからはかみ砕いて説明すべきか、そのバランスにも悩みました。自覚的なムズムズ感と他者から見える落ち着きのなさの違いなど、微妙なニュアンスを英語でどう表現するかも、ネイティブでない自分にとっては大きな課題でした。

### ——発表や質疑応答を経験して

英語での口演はとても緊張しましたが、本番は大きなトラブルもなく、練習してきたとおりに発表することができたと思います。7分という限られた時間のなかで、症例の背景とメッセージとして一番伝えたいポイントをコンパクトにまとめる難しさも実感しました。

質疑応答では、英語の聞き取りに苦労した場面もあり、「あとから考えれば、こう答えたかった」という反省点も多く残りました。一方で、自分の英語力やプレゼンテーションの課題がはっきり見えたことは、大きな収穫だったと感じています。

### ——他の発表者から学んだこと

他の先生方の英語力の高さや、スライドの見せ方の工夫にはとても刺激を受けました。循環器科の実際の手技やダイナミックな画像を用いた発表は、精神科とはまた違った迫力があり、「自分ももっと伝え方を工夫したい」と素直に思いました。今回学んだことを、今後の学会発表でもしっかり活かしていきたいです。

### ——医師として大切にしていること

若い頃は、自分の成長やキャリアアップを優先して考えることが多かったのですが、臨床経験を重ねるなかで、「人のためになることが、結果的に一番自分のためになる」という感覚が強くなっ



### PROFILE

出身地：東京都  
出身大学：旭川医科大学(2021年卒)  
宝物：周りの大切な人たち  
座右の銘：淡々と一日一歩進む



てきました。患者さんやご家族、コメディカルの方々のために力を尽くすことが、自分自身のやりがいにもつながっていると感じています。

とはいえ、当直明けなどで自分に余裕がないときは、あとから振り返って「もっと寄り添えたのではないかと反省することもあります。そんなときこそ初心を思い出し、常に相手の立場に立って考えられる医師でありたいと思っています。

### ——将来の夢や目標について

これからも精神科臨床を軸にしつつ、内科や救急の知識も含めて、より包括的な視点から患者さんを診られる精神科医を目指したいです。また、今回のような症例報告だけでなく、研究として精神疾患や薬物療法のメカニズムを掘り下げていくことにも興味があります。臨床と研究の両方に取り組みながら、自分なりの形で精神医学の発展に貢献していけたらと思っています。

### ——アドバイスとメッセージ

若手医師フォーラムの英語セッションは、国内にいながら英語で発表・質疑応答まで経験できる、NHOならではの貴重な場だと感じました。英語での発表に不安を感じる方も多いと思いますが、その分だけ得られる学びや自信も大きいはずです。

少しでも興味がある方は、完璧を目指しすぎず、ぜひ一歩を踏み出してみてください。準備は大変ですが、終わったときには必ず「挑戦して良かった」と思える経験になると思います。



“若手医師フォーラム”とは、NHOの若手医師を対象に、各自が取り組んできた症例や研究について、NHO等の多職種が一堂に会する国立病院総合医学会にて英語発表(質疑応答も英語)で行われるセッションです。最優秀賞の先生には副賞として国際学会への参加費用が補助されることとなっています。2025年11月7日(金)・8日(土)、金沢で開催された第79回国立病院総合医学会(テーマ:輪・環、そして和 —未来への「わ」の創成—)における、“若手医師フォーラム”の口演発表にて、最優秀賞に輝いた2人の先生に話を伺いました。



口演発表「臨床研究部門」最優秀賞 × Dr. Haruki Abe

## HeadSmart guideline and diagnostic delays in pediatric brain tumors: a retrospective review of 14 cases

四国こどもとおとなの医療センター 小児科 専攻医 阿部 春季 [指導医] 小児血液・腫瘍内科医長 今井 剛



### 小児脳腫瘍のサインを見逃さないために HeadSmart を通じて地域と歩む



#### —— 応募のきっかけ

もともと「学会で何か発表しよう」という話があり、その中で指導医の今井先生から「せっかく発表するなら、若手医師フォーラムで英語発表に挑戦してみては」と背中を押していただいたことが応募のきっかけでした。英語で人前に立って話す機会は、なかなか得られません。正直、不安もありましたが、ここで一步踏み出したほうが、きっと今後の自分のためになると思い、挑戦を決めました。

#### —— テーマについて

今回のテーマは、小児脳腫瘍の早期

診断に向けた取り組みとして、イギリスで始まった「HeadSmart キャンペーン」を当院でどのように活用してきたかをまとめた内容です。HeadSmartは、小児脳腫瘍の症状を、医療者だけでなく保護者にも分かりやすく示したガイドラインで、「どの症状が、どのくらいの期間続いたら受診を考えるべきか」という目安を示してくれます。

四国こどもとおとなの医療センターでは、今井先生の赴任以降、若手医師を中心にHeadSmartの考え方を共有し、院内の診療に取り入れてきました。また、地域の開業医の先生方や看護師、放射線技師の方々にもレクチャーを行い、「脳腫瘍かもしれない」という視点を日常診療の中で持ってもらえるよう働きかけてきました。その数年間の取り組みを振り返り、「早期診断にどう結びつくるのか」を整理したのが今回の発表です。

#### —— 準備で苦労したこと

小児がん領域は、どうしても症例数

が少ない分野です。限られた症例の中で、どこまで「数字」として意味のあることが言えるのか、どのような切り口なら学術的にも伝わるのかについては、何度もディスカッションを重ねました。

また、日本語で考えた内容をそのまま英訳すると、どうしても文が長く、だらだらした印象になってしまいます。英語プレゼンらしく、短く・端的に・スライド1枚あたりのメッセージを絞ることが難しく、原稿を何度も削っては書き直す作業を繰り返しました。

#### —— 発表や質疑応答を経験して

本番前は、英語そのものよりも「ちゃんと場を回せるか」のほうが心配でした。実際、冒頭でPCの操作やマイク、原稿の置き場などに少し戸惑い、余計に緊張してしまったのは反省点です。一方で、ゆっくり話すこと、盛り込みすぎずメインメッセージに絞ることは意識して練習していたので、その点は何とか形にできたのではないかと思います。

質疑応答では、ほかの診療科の先生方からも意見をいただき、「自分たちの取り組みをどう理解してもらえるのか」「どこが伝わりにくいのか」を客観的に知ることができました。プレゼンテーションや英語力の課題がはっきり見えたという意味で、非常に勉強になりました。

#### —— 他の発表者から学んだこと

成人領域の内科・外科・救急など、急性期疾患を扱う演題は、画像やデータも迫力があり、純粋に「すごいな」



#### PROFILE

出身地：宮城県  
出身大学：島根大学(2021年卒)  
宝物：奥さんとの写真  
座右の銘：特になし



と感じる発表が多くありました。一方で、自分の発表は、派手さはなくとも、開業医の先生やコメディカル、他科の先生方と一緒に「地域としてどう小児脳腫瘍に向き合うか」を考える内容でした。

数やインパクトのある図がなくても、現場で積み重ねてきた取り組みを丁寧に言語化することには意味がある、という手応えも得られました。

#### —— 医師として大切にしていることと、これから

臨床の現場では、忙しさや焦りから、つい言葉がきつくなってしまうことがあります。それが相手にどう伝わるかを考えると、あとから反省する場面も少なくありません。「とにかく謙虚に、誠実に」ということを、自分の中での軸として持ち続けたいと思っています。

今回のフォーラムを通じて得た経験を、今後は論文執筆や次の学会発表にもつなげていきたいです。英語での発表や、さまざまな分野の先生方との交流を重ねながら、小児科医としても、一人の医師としても成長していければと思っています。

若手医師フォーラムへの応募は、指導医の先生からのお声がけがなければ、きっと自分からは踏み出せなかったチャレンジです。同じように迷っている方がいれば、「とりあえずやってみる」くらいの気持ちで一步を踏み出してみてほしいです。準備は大変ですが、終わってみると必ず、自分の糧になっていると感じられると思います。